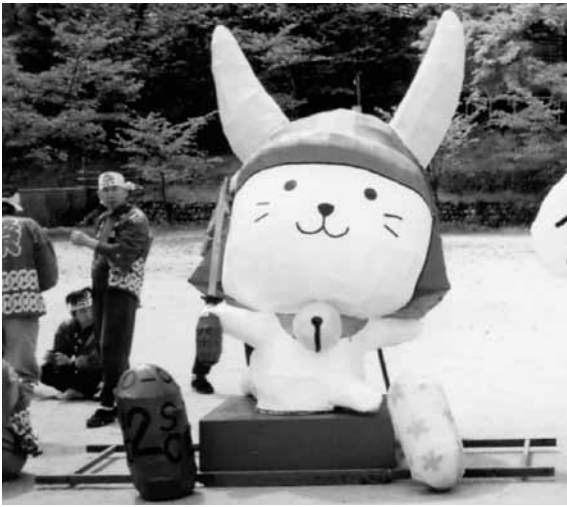




おちほ

第61号 平成20年6月1日発行 社会福祉法人 椎の木会 落穂寮 発行者山下陽一



忘れていたキモチ

昨年度は天候に恵まれません、残念な想いをした氏神祭。今年もその季節を迎え、話題性のあるキャラクターは何だろうか：や他施設と重ならない様にしないと：など色々考えた結果、滋賀で開催されるスポーツレクリエーション大会のキャラクター・キヤッファイ君を作ることになりました。

連日連夜職員が作業し、昨年に続いてまたまた雨だったら：という不安を抱え当日を迎えました。

当日は暑すぎる程のお日様で、寮生さんが運んでくるキヤッファイ君もお日様の光を浴びていきいき見えました。

「ワッショイ!!」の声かけに合わせて皆が一つになり、沿道の地域の方ともあいさつを交わして交流がはかれるという、とっても楽しい行事だとつくづく感じられるものでした。

キヤッファイ君を見ての反応は、「ん？何これ!!」といったものでしたが、昨年御興を引けなかったことで御興をひける喜びをいつも以上に感じる事が出来たお祭りでした。

推の木会のゆくえ

理事長 山下陽一

追悼

私は、今年（二〇〇八年）一月末に推の木会理事長に就任しました。高井前理事長の急逝によるもので、浅学非才行き届かないところも多々あると思いますが、よろしく願っています。故高井理事長は不利な立場のひとの気持ちのよく解る方でした。改めてご冥福をお祈りいたします。

近江学園推之木会

さて、落穂寮を経営する「推の木会」の歴史は、戦後福祉制度の経過それ自体をたどった組織ですが、その結成は敗戦後まもなく（一九四八年）のことで、近江学園の創設と深く関係しています。「社団法人近江学園推之木会」が発足当時の正式名称ですが、その設立趣意書に法人結成の目的について「：強調すべき点は第一に学園の経済的安定である。学園に働く職員達をして後顧の憂えなく教育に専念せしめる」ため学園を後援する、また「近江学園に収容されている不幸な児童のために、いわばP・T・Aの様な役割」と述べられています。近江学園は先人のたぐい稀な努力によって発足したことは多くの場所で語られていますが、法人発足時の支援者の顔ぶれはそうそうたる

面々で、糸賀先生の人脈ネットワークの広がりや層の厚さが垣間見られるものとなっています。

見なれたる大推の木や秋の風

ところで、発足して数年、近江学園にはさまざまな試練が待ち受けていました。前掲の俳句は糸賀先生が「南郷第八号」（一九四八年）に投稿されたものですが、糸賀先生の当時のお気持ちを如実にあらわしているものではないかと思えます。

「著作集1」に当時の寮業や養豚の取り組みについて「二つのにがい体験」を述べておられます。

寮業も養豚も営利的な生産現場を作るといふことで始めたわけですが、乏しい中の資金を投資したものの、売れる製品にはならず、また、大規模な畜産をめざして始めたものの、寒さと飼育環境の悪さから多数の子豚が死んでしまいました。また、「近江学園事件」と称されて、学園の戦後の新事業の目覚しい躍進が全国的に注目されていた半面、それに対する「ねたみ」が元であったのか、当時の「軍政部」の内部調査などあり、世間的な批判に晒されました。これには推之木会の運営についても批判されたようである。近江学園の性格が次第に明確になって来るとき、法人として任意で善意による団体は性格を大きく変えざるを得ない時期になったのでしよう。先にあげた俳句はその複雑な情勢が背後に伺え、糸賀先生の深いため息を感じ取ることができるのではないかと思います。

近江学園に生活していた重度の知的障害児の指導方針としてふさわしいのは、職能訓練より生活の身辺自立の訓練であり、また、生涯にわたる保護施設が必要とされ、推之木会は近江学園の後援団体としての性格を飛躍して社会福祉事業団体として落穂寮の経営に当たることとなり、それが現在に至っています。

お母さんたちが働ける場へ

発足して以来五十七年が経過しました。当時の近江学園の三大スローガンの一つ「四六時中勤務」は、労働基準法に基づく一週四十時間勤務と定められています。給料は製造業の業種とさほど遜色ないはずなのに人材難となっており、近接業種の老人介護関係では、若いひとの確保問題は深刻さを増しています。成人施設は児童施設に比較すると人は集まりにくいといわれておりましたが、それが原因してなのか人材難は古今を問いません。

このようなこともあり、落穂寮では利用者支援の現場に若いお母さんたちに参加してもらうことにしました。今までのように学校を出たばかりの若い人たちに加え、同じ仕事に子育てをしながら戦列に復帰してもらうことになりました。

以前から女性の社会進出と子育てが問題となっていますが、最近、「家庭教育」の隘路子育てに強迫される母親たち（木田由紀著・勁草書房）が出版されましたが、これによると仕事を持っていた母親の三分の二が、出産後仕

事を辞めている、と報告しています。そして、「世間では家庭教育のあり方が喧伝されているけれども」母親たちは、すでに重すぎる重荷を担っている。現在でも要求水準は十分に高く、迷い悩むべき事項は多すぎるほどある。「家庭教育」に関してこれ以上の負担を母親にかけるべきでないどころか、現在の負荷を軽減すること、その負荷をより広く社会で分担し母親の肩を軽くすることが取り組まれるべきである。」と主張しています。

この問題を考えるとき、就労の場と子育てが分離されていることが重要な問題の一つとなっていて、就労できる環境を整えるというだけではなく、子どもの生育発達への母親の関わりが根本的に解決されなければ、若い母親たちの労働力を有意義なものにすることはできないのではないかと考えます。

顧みれば、人口の九割近くが農民であった時代は遠い昔ではなく、四五十年前まで農村の若い嫁たちはそれをやっていたのではないかと、田植えや草取りの時期は畦に幼児をつれて休憩時はその場で乳児に乳をふくませていたわけですね。母親たちは労働の現場に子を連れて働いていました。そのようなことから乳幼児保育の場を、労働する母親のための施設ではなく、乳幼児期の育成発達に叶った理念と方法を考え合わせた施設のあり方とはどうあるべきかを考えなければならぬ時期に来ているのではないかと考えています。

寮長（施設長）就任に挨拶

落穂寮寮長 中嶋 貴一郎

今年も春の訪れとともに、落穂寮の表坂に見事に桜の花が咲きました。

桜の開花とともに、この四月一日より、私、落穂寮の寮長（施設長）を務めさせていただきますこととなりました。

近年の障害者施設を取り巻く諸問題多難なおり、寮長という重責をお受けすることに、随分の迷いと戸惑いがありました。三十五年間のながきにわたり勤めさせていただき、私自身を育てていただいた落穂寮への恩返しと、最後のご奉公をとの思いで一念発起、浅学非力を省みず、お受けさせていただくこととなりました。

常日頃、落穂寮を暖かく見守っていただいている皆様の力強いご指導、ご助力を賜りまして、誠心誠意勤めさせていただきますと存じます。

ので、よろしくお願いいたします。

さて、落穂寮は本年四月より自立支援法の施行に基づいた新体系に移行し、障害者更正施設としての昼夜一体となった事業から、昼の生活介護事業と夜の施設入所支援事業の二本の事業に移行していきます。新体系移行に伴ってどのような諸問題が発生してくるのか、様子を見ていかなければわからない部分も多々あり、今年度は試行錯誤の一年になるのではないかと思います。ただ、重い障害をもつ人にとって、昼夜の連続性は大切な事でもあり、今までと変わらない配慮を持った支援をと考えております。

昨年度一年間の準備期間の中で、その対応を検討してきましたが、いざスタートしてみると、私を含め職員一同が戸惑いの中にある状態です。私自身、早くこの新体系の中で

の運営を理解していかなければと思いつながら、自立支援法と新体系に納得できないでいる自分に気づく日々でもあります。

今、障害者福祉の現場では「サービスマ」や「サービス提供」と言う考え方が一般的になってきています。確かに、福祉は一種の「サービスマ」であり、その意味では、そこに身を置く私たちは「サービスマ提供者」なのかもしれません。しかし、障害者福祉の現場に身を置く私たちが、「サービスマ提供者」と言う立場にとどまっていれば、地域の中で全ての人が普通に共に暮らすという理想は見えてこないのではないかと思います。ともすれば、数字や点数、マニュアルをなぞるだけの昨今の風潮には違和感を覚えずにはいられません。

落穂寮の表坂に咲いた満開の桜を見てみると、四十年近く前、当時、大津から石部の地に移り住んだ落穂寮の敷地には荒涼とした風景が広がり、草もはえない状態で、雨が降ると土手が崩れるありさまでした。それを見た先輩諸氏が、「落穂寮の敷地に緑を」を合言葉に、寮生（利用

者）保護者と一緒になって樹木を植え、育てた日々の姿を思い出していました。それは、それ以後に続く緑との戦いでもありました。それが今も引き継がれ、日々、寮生と職員が一緒になって木々の手入れに取組んでいます。まさに先輩者が唱えた「共に暮らし、共に生きる」の実践の姿ではなかったかと思つています。それが今、満開の桜となって、花開いているのではないのでしょうか。

私は落穂寮を訪ねてくる人に「落穂寮の自慢は緑です」とよく話します。それは、落穂寮の緑に寮生と職員、保護者、支援していただく皆さんが一緒になって創り、育ててきた「落穂寮の心」を映し出しているからです。諸先輩が築いてきた「落穂寮の心」をいつまでも守り、伝えていければとの思いで、来訪者の方に話しかけています。

私も、先輩者の理念、先輩諸氏の思いを引き継いで、落穂寮の先頭にたたせていただければと思つていきます。

今後とも、暖かく見守っていただきますようお願いいたします。

お久しぶりです。阿部^{アベ} 忍^{シノブ}です。6年ぶりに落穂寮に戻って来ました。この6年の間に結婚し、2児の母になり、私自身も大きく変わりました。子を持つ親の立場になり、以前働いていた時とはまた違う気持ちを持って、寮生さんに向き合えるのではないかと思っています。言葉ではなかなか伝える事が難しい、寮生さんの大きな変化はもちろん、小さな変化にもすぐに対応できるようにと思っています。寮生さんが安全に安心して生活できる場を提供して、楽しく充実した毎日が送れるように、お手伝いしていきたいと思っています。一緒に笑顔で過ごせる時間を大切にしたいと思っています。新鮮な気持ちで頑張ります。よろしくお願いします。



今年から男子棟で働く事になりました。千恵^{チエ}です。私が、福祉関係の道に興味を持ったのは、小学生の頃でした。私の家の方と友達になり、よく一緒に登下校をしていました。色々話し聞いたりもつうちに、もっとたくさん多くの方と関わり、知りたいと思い、ボランティア等を通して、今に至ります。縁あって、落穂寮の生活支援員として働かせていただける事になりました。

私のモットーは、「笑顔で楽しく」です。これから先、落穂の寮生さんとたくさん一緒に楽しく、笑顔の多い時間を過ごしていけるように頑張っていきたいと思っています。どうぞよろしくお願いします。

二〇〇八年この春からこちらの落穂寮に職員としてお世話になっております中西^{ナカニシ}憲吾^{ケンゴ}と申します。以前は大学生としてボランティア活動に取り組み、その中で共に生活するという事に深く感銘を受け、私自身そのような共存の生活に強く憧れていました。

その大学生時代には京都で一人暮らしをさせて頂き、慣れ親しんだ土地を離れるのは寂しくもありましたが、新たにこの場所で見なさんと共に暮らす事で感じる事や得る事を大切にしていきたいと思っています。

社会人としてはまだまだ未熟ではあります。少しずつ成長していこうと思っています。これからも末永くよろしくお願いします。



はじめまして。前田^{マエダ}健太^{ケンタ}と申します。京都保育福祉専門学院の保育科を卒業し、この春から男子棟の職員として勤務させていただきます。

この仕事をしたいと思った動機は、学生の時の実習です。知的障害者授産施設と知的障害児生活施設で実習させていただきました。学院へ入学するまでは、障害を持った人たちと関わる事は、あまりありませんでした。実習を通して関わる事で、この分野に興味を持ち働きたいと思いました。

まだまだ自分自身が未熟なので、これから学ぶ事も多いと思います。自分を育て、対人援助者として成長していきたいと思っています。よろしくお願いします。

新人 2008 紹介

初めまして。京都保育福祉専門学院 社会福祉科を卒業し、四月から落穂寮女子棟職員としてお世話になっている西原^{ニシハラ}春香^{ハルカ}です。

在学中は主に高齢者分野の学びを深めて来ましたが、今まであまり経験した事のない分野を働きながら学びたいと思い、障害者のグループホームの支援者を約一年半行っていた事もあり、障害分野へ進もうと決めました。



初めまして。四月より女子棟職員としてお世話になっていきます西川^{ニシカワ}佳織^{ヨシオリ}です。滋賀文化短期大学人間福祉学科児童福祉専攻を卒業しました。

私が障がい者福祉に興味を持ったきっかけは、中学生の時にしたボランティア活動でした。サマースクールなどで障がいを持つ方々と関わりを続けていくうちに、支援する仕事ができたららと思いはじめ大学で勉強し、今があります。

まだまだわからないことが多く、いっぱいいっぱい毎日過ごしています。そのため他の職員さんや寮生さんにも迷惑をかけることもありませんが、寮生さんとの関係作りにも努め、どのような支援が求められるのかを常に考えていきたいです。よろしくお願います。

初めまして。華頂短期大学幼児教育学科を卒業し、この四月から落穂寮の職員としてお世話になっていきます森田^{モリタ}佑佳^{ユウカ}です。

自宅が東寺内にあるので、この施設の事は幼い頃から知っていました。そして、実習で来させて頂き、縁あって働かせて頂くことになりました。福祉についての知識は乏しいですが、高校生の頃から参加していた、余暇支援での経験や、実習で学んだことを活かし、利用者の方と向き合っていきたいと思っています。



また、幼い頃から見えてきた行事ごとにも参加できることを楽しみにしています。

至らない点ばかりではありますが、精一杯頑張りますのでよろしくお願います。

初めまして。四月より女子棟職員としてお世話になっていきます西川^{ニシカワ}佳織^{ヨシオリ}です。滋賀文化短期大学人間福祉学科児童福祉専攻を卒業しました。

私が障がい者福祉に興味を持ったきっかけは、中学生の時にしたボランティア活動でした。サマースクールなどで障がいを持つ方々と関わりを続けていくうちに、支援する仕事ができたららと思いはじめ大学で勉強し、今があります。

まだまだわからないことが多く、いっぱいいっぱい毎日過ごしています。そのため他の職員さんや寮生さんにも迷惑をかけることもありませんが、寮生さんとの関係作りにも努め、どのような支援が求められるのかを常に考えていきたいです。よろしくお願います。

新人紹介（お炊事編）

昨年の十一月より炊事のパート職員としてお世話になっております門田なずなと申します。出身は滋賀県大津市です。現在は菩提寺で主人と2歳になる息子と犬と一緒に暮らしています。菩提寺近辺で小さい子供と犬を連れて散歩しているのは私です。

落穂寮に來させてもらって約半年が過ぎ、ようやく少し慣れてきたかなという感じですが、まだまだ失敗も多く皆さんに迷惑をかけていますが、主婦の先輩方と栄養士さんと楽しくお仕事をさせてもらっています。寮生さんが「今日のごはんは何ですか?」と聞いてくれて皆さん食事を楽しみにして下さっているのうれしいです。これからも家庭的でおいしい食事を作っていきたいと思えます。どうぞよろしくお願ひします。



初めまして、今年一月十四日よりお炊事をする事になりました。嘱託の柏原栄子です。お炊事する様になりまして三ヶ月が経ちました。職員さん寮生さんに満足していただける料理が出来る様がんばっていきたいものです。少しずつではありますすが、職員さん寮生さんの顔と名前を覚え、みなさんと朝のあいさつをしたりと本当に充実した、毎日を送っていると感じています。まだまだ覚えることが沢山あり、つまづく事もあると思いますが、日々、成長の思いで楽しくがんばって行きたいと思っています。まだまだ半人前以下で、ご迷惑をかけない様一生懸命がんばりますので、ご指導よろしくお願ひします。

桃栗三年柿八年 落穂で五年おめでとう!

表紙で紹介された氏神まつりの行われた五月一日、この日は落穂寮の開寮記念日でもあり、お昼からはそのお祝いの昼食会がありました。食堂は、きれいな切り紙や紅白幕に飾られて、お祝いのムードでいっぱい。そしてもうひとつお祝いの事。今年は男子棟の建部光恵さんと女子棟の伯川美晴さんの二名が勤続五年目となり、表彰されることになりました。パチパチパチ（拍手）。普段あまり見慣れないスーツ姿の二人に寮生さんの目も集まります。まずは寮長から、賞状とお祝いの金一封が手渡されました。そして、それぞれ担当の寮生さんから花束の贈呈が。建部さんには木之元さんか



建部さん（左）と木之元さん



伯川さん（右）と紺谷さん

ら、伯川さんには紺谷さんからそれぞれ大きな花束が贈られました。しかし、ここで勘違いした紺谷さんがひと言。「伯川、辞める。」（確かに花束はそういった時にも贈りますけど…勝手に職員を辞めさせないで下さいね）会場は大ウケで、和やかな雰囲気。表彰された建部さんと伯川さんの挨拶には会場からみんなの拍手が贈られました。「おつかれさま。これからもよろしく。頑張つてね。」という、寮生さんの心の声もしつかり伝わったのではないのでしょうか。「まだまだ辞めずに、頑張つてほしいなあ。勤続十年目にもう一回お祝いのから。」という職員さんの声も…。



七十一名の

大遠足

四月十三日、落穂寮では、お花見遠足に行きました。例年、男子棟、女子棟とそれぞれ別々に行ってましたが今年は目的地が同じ所での遠足となりました。

場所は阿星児童館の前の公園に行きました。寮生さんの身体能力に合わせて歩行コースを決め、それぞれのコースを歩きました。当日は曇りでしたが、歩くには暑くもなく、寒くもない気温で寮生さん、職員共に気持ち良く歩く事ができました。



桜はやっぱりキレイ♡

お昼前には全員目的地に着。目的地の桜は若干、前日の雨で少し散っていましたが、とても綺麗に咲いており、私達を迎えてくれました。

お昼は外という事もありお弁当！外で食べる食事は寮生さん、職員共に何かウキウキします。今回は某有名デパートで売られているお弁当でした。（私、個人だったら絶対に買う事のない弁当です。）季節の食材をふんだんに取り入れたお弁当でした。注文、公園までの運搬をしていたいた栄養士、お炊事の方々、ありがとうございます。食べている間に桜の花びらが舞う中、おいしくいただきました。お弁当の後は、公園の遊具で遊ぶ方、のんびり桜をながめている方、それぞれの時間を過ごしました。

最後に各棟で記念写真を撮り、寮の方へ戻りました。春の風景、春の食材を寮生さん、職員、合計七十一名の遠足はとても楽しい一日を過ごす事ができました。



『五感刺激』

4月3日。栗東のなかよし作業所にて行われた「アートコラボレーション」というイベントに寮生さんと参加させて頂きました。

プロの舞踏家・岩下さん、民族楽器奏者の慧奏さん、お2人の創り出すなんとも言えない異空間に寮生さんも耳を澄まし、目を見張り…心はフル回転といった様子でした。言葉のない舞台、でも言葉だけが心を伝える術ではないのです。

鳥のさえずりと民族楽器の不思議な音色が聞こえるだけの静かな空間、そして吹き抜けの窓から見える青い空の下で、どの寮生さんもとて静かに・穏やかに、その時を過ごされていました。

目だけで
ない。耳
だけで
もない。
ぜん
ぶ、ぜ
んぶ…
芸術は
五感を
通して
感じるも
のなので
すね。(笑)



鳥取紀行
新年度突入！ではありますが、前年度に忘れ物が…。リフレックス旅行最終組の紹介です。3月に行かれた為、この広報誌の前号編集に間に合わなかったのです。
行き先は鳥取。お2人共、それぞれに楽しんでおられたとのことでした。(笑)



泉

▼新年度が始まりました。そして、新事業体系が、新体制で始まりました。前号でも書きましたが、フタを開けてみて、ますます、この不可解な現象に困惑しています。

人が増えました。でも、人が足りないのです。超過勤務も減りません。さらには、これまで取り組んでいた活動にも影響を及ぼし、利用者の楽しみも減ることになってしまっています。どこから見ても、やはり不可解な現象です。しかし、それでも利用者の人生は私達の支援で豊かになれば、貧しくもなるのです。

利用者とは直接かかわる時間を、これまで以上に敏感に、豊かに、大切に、楽しく、心をかけて、全職員ですごせたらと思います。これからも御支援下さい。

こゝろ 木言

わたしにとっては自慢の枝も、彼にとってはただの枝。

自分には必要ないからと、切り落とす前に、もう一度、ちがう場所から観てください。大切にするのは、彼方の傲慢ですか。

それとも、私のこゝろですか。